

## 高杉晋作と長崎 動けば雷電の如く

高橋 昭子

2月7日、劇団はぐるま座は総勢18名で『動けば雷電の如く』長崎公演に向けてポスター貼り行動を開始した。浜町商店街をはじめ、長崎市内の商店街に行き、1軒1軒お店を訪ねてポスターを貼らせていただいた。何処でもとても好意的で、ポスターは、わずか4時間で450枚が市内に貼り巡らされた。中でも丸山は、高杉晋作が出入りしていた場所でもあり、史跡料亭花月では、女将さんがとても喜ばれ、何とか支援したいと後援団体に名前を連ねてくださった。

花月にある我が国初期の洋間で高杉晋作は薩摩の五代友厚（五代とは幕府使節団で上海に行った時からの旧知の仲）と会談し、イギリスから倒幕のための武器を手に入れる商談をまとめたと言う。薩長同盟の前身である。

地元の人達から聞いた話では「高杉は丸山には功績がある」と、町の人達は言われる。そしてポスター貼りにも御協力を戴いた。

年金が入ったら買いますからとチケットを予約して下さった老婦人。浦上の弁当屋さんは社員研修で皆で見に行くので、3月になったら30枚



高杉晋作(動けば雷電の如く)

のチケットを持って来てくれと言われ嬉しかったし、また街で「長州から来たのか、あんたらの心意が良いい」とカンパを寄せて下さった。「高杉晋作!長州の若い熱血漢だね、これは長崎のためになる良い事だから

頑張ってください。」と激励される老人会会長さん。そして「原爆で日本は滅茶苦茶にされて、若者がベタツと道端に座り込んで、日本人としての誇りを忘れている。高杉さんのような政治家が出てこない日本はダメになる。」とも言われた。

晋作がおこなった四カ国との講話談判のように、戦に負けても、賠償金も彦島譲渡も蹴るような気概が今必要だ。」などいたるところで劇の内容についての共感を示された。

### ○演劇・『動けば雷電の如く』

この劇は、徳川幕藩体制が完全に行き詰まり、外からは欧米列強諸国が開国を求めて押し寄せてくる激動の時代に、憂国の志に燃えた高杉晋作が、土農工商の身分にとらわれない「奇兵隊」を結成する所から始まる。豪商でありながら私財を投げ打って資金を調達した白石正一郎をはじめ、無名の農民、町人などたくさんの方々が命をかけて決意し、奇兵隊に入隊し、世碌の武士に負けない力を発揮している。

奇兵隊には「農事の妨げをしない」「強き百万の兵といえども恐れず、弱き民は一人であろうと恐れること」「言葉は丁寧で、人から親しまれるようにせよ」などの隊則が定められている。それがより多くの領民たちの信頼を集め、苦しい時こそ一致団結していく姿には素晴らしいものがある。「このような私利私欲でなく、世のため、人のため、命をかけた人々の前向きな生き方は、混沌とした現代を生き抜く私達にとって、大きな糧になることだろう。」と、皆様が期待を込めて語って下さる。

### ○長崎の町は長州びいき!そして、薩長同盟は長崎の地から始まる。

長崎の地は天領であったので、長州藩は禁門の変で「朝敵」の汚名を着せられ、長崎奉行所から追い出され、新町にあった長州屋敷にも出入が禁止になった。しかし、長州の若者は薩摩藩士と名乗って長崎にきて活動をしていた。追放されても尚、倒幕に命を燃やす長州の若者たちを、長崎の人達は何かと支援をしていた。その気風が今も引き継がれている

## 風信

○三月と言えば、お彼岸がくる。「暑さ寒さも彼岸まで」と言う。例によって彼岸の語源を聞いてこられた。彼岸の語源はサンスクリット語(古代インド語)の Pariman tiram (Parimita) であり、其の意味は「川むこうの岸」と訳してあった。理想の世界の意である。

○二月二十日、午後、長崎日本ポルトガル協会平成二十一年度総会がホテル・グラーバーヒルを会場に開催された。先ず先日亡くなられた二十六聖人記念館の結城了悟神父様に対する黙想に始まり、会長の藤原長崎ポルトガル名誉領事の挨拶、行事・会計報告、新入会員の発表、そして最後に二十六聖人記念館長レンゾ神父様より「結城神父の功績をたたえて」のお話をうかがった。

○その翌日、本会会友の小佐々研介氏来訪「結城神父様の記念碑を建てる会を考えましょう。」と提案を持ってこられた。私は大いに賛同し、小佐々氏を中心に其の準備を進めることにした。

○そして、其の翌々日、陶芸家でスペイン文化を学んでおられる右近彰夫氏の来訪あり。長崎学とは関係の深いスペインと長崎の文化を考える「スペイン・クラブ」の創立を提案してこられた。私は長崎初期の文化は南蛮文化であり、ポルトガル・スペインの文化は大いに研究しておく可きであり、スペイン倶楽部の創立、これにも私は大いに協力申し上げることにした。

○三月二日(月曜)午前十時半より本会の長崎学研修会を開催(本会講習室にて)三月第一回の講師は前長崎歌人協会会長長久保美洋子女士。お話は「長崎旧市内、八幡町あれこれ」と懐しい昔話で満席の参会者一同を大いに楽しませて戴いた。本会は毎週月曜午前十時半より開催しておりますので御自由にお出かけ下さいませ(会費不要・資料代各自)

○長崎市立図書館の鈴木忠先生・早野董主事来訪あり、私が今まで各方面より御協力を戴き集めさせて戴いた地方史を主にした各資料集(書冊)を「越中文庫」として保存して下さいとの事。私は先年純心大学博物館の片岡館長先生から、「古文書には虫がつきやすいのであなたの古文書も保存してあげましょうか」と言われ、保存して戴いた事を思い出し、資料の保存は各方面よりの御協力がなければならぬとしみじみと考えさせられた。

ことを、私たちは今回、ポスター貼りをして町まわりをしながら強く感じた。

薩長同盟はお偉いさん達のみがやったことではない。もともと薩摩と長州の若い者の中にそのような素地があったからである。それは長州藩が「禁門の変」によって追放された後も、薩摩藩士を名乗って活動していたことにあらわれている。長崎で高杉・五代会談も行われたように、長崎を舞台に薩長同盟は実質的に着々と動いていた。そして、それを長崎の町衆が大いに支援したことが今も此の町の誇りになって語りつがれている。

### ○戊辰戦争に行った長崎の町衆、振遠隊・300人

長崎は天領だったので、治安維持部隊の遊撃隊が長崎奉行所のもとに組織されていた。その遊撃隊を政勢の変化に伴って解散し、勤皇派の振遠隊に編成変えをした。徳川幕府が不平等条約を結び横浜と函館を開いた関係で、外国貿易を一手に引き受けていた長崎の町は経済的に大打撃を受けた。そして、また出島に押し込められていたオランダ人をはじめ外国の人達が町に出てきて風紀の面でも何か危くなってきた。「このままいけば上海や香港のように長崎は植民地になる。それは絶対に避けねばならない。徳川を倒さねば、このままでは大変な事になる。」九州諸藩から続々と「戊申の役」に朝廷が参加する情報が入ってきたので長崎の町衆約300人が振遠隊に参加し、奥羽戦争(戊辰の役)に参加している。その時、町中は大いに湧きたち、見送りの人々でごったがえした。そして又振遠隊が凱旋して帰ってきた時は、6ツ半(夜の8時頃)にもかかわらず、町は出迎えの提灯でまるで昼のようだったと書かれている。町中が倒幕で沸き立っていたと記してある。

### ○今よみがえる長崎の誇り

今回、私達はこの長崎人の誇りを町中によみがえらせ、長崎本来の底力をこの『動けば雷電の如く』公演を機にしつかりと学び、明治維新当時の迫力のあった当時の長崎の姿を大いに広めていきたいと思っています。(劇団はぐるま座本部役員)

〔公演〕 4月12日(日) 長崎市公会堂、昼の部、午後1時30分、夜の部午後6時30分。

長崎歴史文化協会研究室

TEL 八二二一五四〇

十八銀行公会堂前出張所2F

